

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

継続して観る～ドングリ～／岡崎市島坂保育園（愛知県）

四季を通じて、または学年をまたいでなど、長期に亘り、子どもたちの植物への興味・関心に注目し、記録を取ったことはありますか？

ドングリから芽が出てきたことを発見した2歳児が、そのドングリを植えて、3歳児となった春に、学級の友達（異年齢学級）と植え替えをし、さらに生長を期待しながら、興味を深めていく姿に注目している事例をご紹介します。この過程に「科学する心」の育ちを捉えることができます。



● ドングリの生長観察を楽しむ／2～5歳児

✦ 2歳児の時

● 10月27日：ドングリをたくさん拾ったよ！

- Aちゃんが、袋一杯のドングリをニコニコしながら保育園に持ってくる。
- 保育者は、「ドングリをたくさん拾ったね！」と、受け止め、子どもたちがドングリを見やすいように、空き箱の中に広げる。保育者が、ドングリコマを作っていると、Bちゃんが「私も作ってー！」と言い、ドングリを選ぶ。
- Cちゃんがドングリを振りながら、「カチャカチャいってるよ！」と気付く。その姿を見て他の子どもたちも「これは鳴らない？」と違うドングリを振り音を確認し始めた。
- Dちゃんが、「先生見て！」と穴の開いたドングリを見付ける。目をキラキラさせている。
- Eちゃんが、「木から落ちた時かな？」と言うと、「誰かが空けたのかな？」「最初から空いていたんじゃない？」等、思い思いの考えが返ってくる。
- 保育者は、子どもたちの考えを否定しないように、「そうかも知れないね。虫さんが食べたのかも知れないね」と受け止める。
虫が食べた物だと聞くと、驚いた顔をし、Fちゃんは、「硬いのだね！」と言いながら穴を覗きこんで「虫さんいるかな？」「温かいのかな？」と想像している。

● 11月4日：先生大変！虫虫！

- Gちゃんが、ドングリがたくさん入っている袋を見ながら、「先生大変！虫虫！」とびっくりして知らせに来る。よく見ると、虫ではなくドングリの芽だった。
- 保育者は、「G君これは虫じゃなくドングリの赤ちゃんだよ」と伝える。初めて芽を見た子どもたちは、白い芽が虫に見えたようだ。
- Hちゃんが、「じゃあ、木になるの？」と言うので、保育者は、「どんな木になるのかな？」と尋ねる。
- Iちゃんは、「大きい木だよ！」と、子どもたちは公園の木々を思い出した様子で、嬉しそうに話す。「保育園にも木があったらいいね」と興味を示す。



- 保育者が「ドングリさん植えてみようか?」「大きな木になるかもしれないよ!」と話すと、子どもたちは「やりたい!」と大歓声をあげる。

● 11月5日：ドングリを植えよう!

- 子どもたちは、芽の出たドングリを、一人ひとつずつ自分の場所を決めて、指で土を掘りプランターに植えた。
- 保育者「ドングリの芽大きくなるかな?」、Kちゃん「早く大きくなってね!」と言い優しく土を掛けている。
- 「水あげないといけないね」「今日はぼくがあげる!」「じゃ、あたしが明日やるね!」などと、2歳児なりに自分たちで話し合い決めている。子どもたちの好奇心や、“自分で育てたい、やってみよう”という思いを感じた。
- しばらくして、子どもたちが、沢山の落ち葉を拾いドングリにかけていた。
Lちゃん「これだけあれば寒くないよね」Mちゃん「ドングリさんお休みなさい」と優しく話している。

✦ 3歳児になって

● 4月24日：ドングリを植え替えよう

- 春になり、子どもたちが落ち葉をどけると、少し伸びたドングリの木が出てきた。
- 植えた時は2歳児だった子どもたちも、3歳児になり新しいクラスになった。(3歳児・4歳児・5歳児の縦割り学級)
- 保育者は、4・5歳児に“3歳児がひよこ組の時に植えたドングリ”であることを紹介する。子どもたちは、大変興味を示し、みんなで植え替えることになる。3歳児は、「ドングリ出てくるかな?」「ぼくが持って来たドングリだよね!」と得意になる。
- 5歳児「見てー!ドングリがあるよ!」「本当だ!ドングリから根っこが出てるー!」5歳児の子どもたちは、ドングリから根っこが出ているのを見てよく理解していた。全部で8本、子どもたちと相談し、場所を選び植えることにした。
- それぞれの場所に、5歳児が率先して、穴を掘り植えた。Mちゃんは、「ここは土が固いなー!」「これくらいで植えてもいいかな?」などと、友達と相談しながら進める。子どもたちは自然と、「大きくなあれ、大きくなあれ!」と生長に期待している。植え終わると、それぞれの箇所の看板作りを始めた。
- 保育者は、「これから水をあげたり、大きくなったか調べていこうね」と興味を持続するように願い、言葉をかけた。



● 6月1日：ドングリの背くらべ

- 子どもたちは、毎月「ドングリの日」を決めて、生長を測ることに興味をもった。この日も、背の高さを測ったり、葉の枚数を調べたりすることを楽しんだ。
- 5歳児Nちゃんが、「僕、職員室のとこ見てくる!」と数人の友達と見に行く。「なんか元気ないね?」「植えた時、根っこがいっぱいだったからね」「水あげようか」と、思い起こし心配して話している。



● 7月3日：やっぱり元気がない

- 子どもたちは、職員室の横の木が気になっている。5歳児Lちゃん「Sくんどう?」「やっぱりあんまり元気がないねー」「水もっとあげる」「あげすぎもよくないと思うよ」「他のところは元気なのね」「周りに木が多いからじゃない?」「太陽の光が当たらないからかな?」と話し合い、木に向って、「おーい、元気になってよー」と言う。子ども同士で、気付いたことを伝え合い変化をよく見ていると感じる。元気のない木を心配している。



● 8月28日：葉っぱが落ちている

- イチゴ畑の右に植えた木を見に行った子どもが、「大きくなったね」「でも葉っぱが増えてないね」「近くに草が生えてるからじゃない?」「じゃ、抜こう!」と言い雑草を抜く。
- 職員室の横の木は、「やっぱり元気がない」と、気付く子どもたち。
4歳児「見て、これ、葉っぱ」4歳児「ドングリの葉っぱ落ちてるね」職員室の横以外の木は、相変わらず葉も生き生きして順調に大きくなっている。職員室の横の木は葉が3枚になってしまった。4歳児は、この場所が気に入り、「2人でこれから見にこようね」と相談していた。
- 5歳児が中心になり、観察をしていたが、4・3歳児も、情報を聞くことで関心が増し、5歳児について見に行くようになった。保育者は、クラスの壁に、ドングリマップや生長グラフを貼り、変化を見ることができる環境にした。



✦ 考察

- 2歳児なりに考えたことを、言葉で表現したり、虫の気持ちにちになったりしている。小さな「なぜ?」を受け止め、保育者も一緒に考えていきたいと思った。2歳児にとって、今まで「物（ドングリゴマ）」であったドングリが、「友達」「生き物」として関わる対象になっている姿に心の変化を感じた。日々の関わりの中でドングリに愛着をもち生長を心待ちにするようになった。
- 子どもたちは、ドングリへの興味を深めていったことで、さらによく観るようになり、場所によるドングリの木の生長の違いに気付いたり、原因を考えて解決したりするようになった。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム
幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」